

「学ぶ力」	
成果	課題
◇協同的な学びを基盤としたペア・小グループ学習を全校で取り組んでいる。その結果自ら「分からない」と発信する子が増え、「分からない」ことを共有し、理解が深まったり、主体的に学んだりする姿が多く見られた。 ◇自らの困りを解決するためのアプローチを自分からとることができている。 ◇既習事項でつまづきがある子も、環境や他者の支えにより学びからの逃走を防ぐことができている。 ◇困りを全体で取り上げ、その困りに寄り添って思考をすることで、自らの学びに対しても、思考が整理されたり、新たな見方から検討・修正したりするなど学びの深まりが見られる。 ◇単元を通した目的意識の構築が、児童の学びの定着につながっている。	◇児童がどこまで分かっているかをどのように適切に見取るか。 ◇その授業で何を身に付けるか（どのような児童の姿を目指すか）を教師が明確にもつこと。 ※児童を直接的にそのような姿に操作することを意味しているわけではない。 ◇既習事項の弱さが見られる。 ◇子どもの言語力によって、学びの深まりに差が生じる。

「学ぶ力」の基盤〈協働を通して磨く 相互承認の感度〉の現状と課題

- ◇「一人残らず子どもの学ぶ機会を保障し、その学びの質を高めること」「学びの質と平等の同時追究」から、分からない子が自ら他者に援助を求めることができる力を付け、分かる子はそのつまづきを理解し対応する「ケアの関係」を築くことを目指し、安心して「聴き合い」ができる学習環境・集団作りの取組を全クラスで行っている。昨年度では学び合いの出発点として、「なぜそれを問いたいか、なぜそこに着目したのか」という子どもの動機を明らかにすることに着目し、児童の学びの実態に合ったもの、教科本質の学びに即した学びを目指した。その結果、児童が自ら困りを表出したり、学び方の選択などによって学習意欲を維持したりすることができ、学びの逃走を防ぐことができている。また、教職員が授業公開において子どもの姿から学ぶことによって、子どもの困りを見抜く目を養うことができている。
- ◇課題としては、児童の探索的対話に必要なレベルの基礎基本の未定着、児童間の学びの対象のずれ、聴き方の未習熟が挙げられる。また教職員においては、子どもが「どのように学んでいるか」「何を学んでいるか」の見取りの困難さや、板書等基礎的な教師の授業技術を身に付ける機会が少ないことが挙げられる。

「学ぶ力」の育成のために着目する資質・能力

進んで 聴き合い学び合う子

取組	課題探究的な学習の推進 に向けて	自主的な活動の充実 に向けて
	(1) 協同的な学びによってすべての子どもが学ぶ学習環境の整備 (2) 誰一人独りにならない授業の構築と教科研究 (3) 児童の探究意欲が続く課題の精選 (4) 教科の本質に即した「真正の学び」の追究	
<h3>「学ぶ力」の育成の一層の充実を図る ICT の活用について</h3> <p>◇本校研究副主題「教科本質の学びを土台とした本物の体験による授業の創造」に基づいて、教科の本質の学びを追究するために必要なICTの活用方法を精査していく。 ◇文部科学省・中央教育審議会・各種教育研究機関の見解をもとに、活用の方法や頻度を校内研究にて議論していく。</p>		

<本プログラムの実行に向けて>

新年度 ◇本プログラムの共有 ・職員研修日 ・パートナー校間研修	【一人一人の教職員】 ◇日常の授業・教育活動 ◇各自の研修（札教研・校内ブロック研修等）	【学校全体】 ◇春の札教研 ◇子どもの育ちを共有 ・校内ブロック研修・パートナー校間研鑽	次年度△ ◇学校評価 ◇成果と課題を共有 ・研究全体会（3月予定）
--	--	---	---